

# 法廷でのソクラテスの弁論について

——プラトン『ソクラテスの弁明』および『ゴルギアス』から——

田代 嶺

[キーワード：①プラトン ②『ソクラテスの弁明』 ③『ゴルギアス』  
④真なる弁論術 ⑤「慣れ親しんだ言葉」]

## 序.

本稿ではプラトン『ソクラテスの弁明』（以下『弁明』と略記）で描かれているソクラテスを、プラトン『ゴルギアス』で描かれているソクラテスの姿から考察することを目的とする。紀元前399年にソクラテスは裁判にかけられ、その結果として、死刑になった。これは歴史的な事実であろう。しかし、その裁判でソクラテスが実際にどのように振舞っていたのかに関しては、意見の一致を見ることができない。というもすでに古代の段階で、ソクラテスが法廷でどのように振舞っていたのかについては、様々な見解が存在しているからである<sup>1)</sup>。では、プラトンが描いたソクラテスは、法廷で何をしているのだろうか。あるいは、プラトンはどのような意図で、法廷でのソクラテスを描いているのだろうか。本稿ではこの問題に対する回答を、『ゴルギアス』を用いて示していきたい。

『弁明』を考察する際に、『ゴルギアス』を用いることは決して不合理な

ことではない。というのも、『ゴルギアス』(521E-522A)でソクラテスが話す、「料理人による医者への告訴」のたとえ話は、実際にソクラテスになされた告訴に比することができるからである<sup>2)</sup>。ここから『ゴルギアス』と『弁明』の関係を、アレンの言うように「密接である<sup>3)</sup>」(intimate)とみなすこともできるのである。

実際の考察は、弁論の始まりでのソクラテスの次の言葉の解釈から始めたい。

ですがゼウスの神にかけて、アテナイ人のみなさん、彼らの弁論のような、美しく彩られた言論や、多彩な語句や表現で整えられた言論を、あなた方は聞かないでしょう。そうではなく、あなた方が聞くのは、思い付きの言葉で適当に語られた言論でしょう。というのもわたしは、わたしが語ることの中身が正しいと信じていますから。ですから、あなた方はみな、これ以外のことを期待しないでください (Ap. 17B-C)。

また続けて、自分がこれから使う言葉についても以下のように述べている。

そこでぜひ、アテナイ人のみなさん、あなた方をお願いして、許してほしいことがあります。公共広場の両替商のところやその他の場所で、わたしがいつも話しているのを (εἰωθα λέγειν)、あなた方の多くは聞いているでしょうが、それと同じ言葉でもってわたしが弁論するのを聞くとしても、そのために驚いたり、騒いだりしないでください (Ap. 17C)。

自分がこれから行う弁論では、アテナイ市民たちが聞いたことがあるような言葉や語り方が使用されることを、ソクラテスはわざわざここで注意し

ている。ここで言及されている話し慣れた言葉や喋り方を、本稿では「慣れ親しんだ言葉<sup>4)</sup>」と呼ぶことにする。

さて、このようにして「慣れ親しんだ言葉」の使用を宣言するソクラテスの態度は、「何か挑戦的な感じがする<sup>5)</sup>」ものだと聴衆に受け取られる可能性がある。無罪を勝ち取ろうとするのならば、そういった印象を与えることは不利に働くことになるであろう。このような挑戦的なソクラテスの態度には、どのような意味があるのだろうか。本稿ではまず、弁論冒頭でのソクラテスの言葉に注目した研究を概観していく。次に、法廷でのソクラテスの言動を解釈するために、『ゴルギアス』における「真なる弁論術」と「劣悪な弁論術」の区別を参照する。そして最後に『弁明』に戻り、法廷においてもソクラテスは哲学をし続けている——少なくともプラトンはそのように描いている——ということ、を、「慣れ親しんだ言葉」の使用という点から示したい。

## 1. 『弁明』冒頭部（17A-18A）に関する諸研究

本章では、序論で示したソクラテスの「慣れ親しんだ言葉」が、これまでどのように解釈されてきたのかを概観していく。実際の弁論に入る前のソクラテスの言動は、その後の弁論に対しての、さらに言えば、法廷弁論そのものに対してのソクラテスの態度を如実に表していると、これまでの研究者たちは考えてきた。たとえばリデルは、『弁明』の序論（exordium）においてソクラテスが使う言葉や議論の進め方は——ソクラテス自身の否認にも拘わらず——徹頭徹尾、技巧的（artistic）であるとする。それゆえにリデルは、「この弁論における巧妙な弁論術は、歴史的なソクラテスと一致しない」と結論し、『弁明』の序論は「それぞれ完全に、弁論家による弁論に比することができる」と考えた<sup>6)</sup>。リデルのこうした指摘によって、『弁明』という作品全体の解釈に関する、ひとつの大きな流れが形成

されたと言える。すなわち『弁明』は、弁論家が用いる弁論術のパロディになっているのだとか、法廷におけるソクラテスの言葉は、アイロニーとして理解されるべきであるという解釈である。例えばバーネットは『弁明』全体を以下のように理解している。

『弁明』とは、まったく弁論 (defence) ではない。むしろ『弁明』によって、ある人物のキャラクターが強調されているのだと考えることは、疑いようもなく、完全に正しい。ソクラテスは告発を軽蔑的に扱い、おおよそ陪審員たちの敵意を取り除くことがないような性質のことを、わざわざ法廷に持ち込んでいる<sup>7)</sup>。

加えてバーネットは、ソクラテスによる法廷弁論に関する知識の否定はそれ自体がパロディであり、ソクラテスは当代の弁論術に完全に精通していたけれども、それを見下し、当代の弁論術の定型句 (commonplace) により深い意味を込めて、改良しているのだとする<sup>8)</sup>。

以上のバーネットの見解は、その後の研究者たちに多大な影響を与えたと言えるだろう。アレンはバーネットと同じく、『弁明』は、通常考えられているような弁論とは異なる何かであることを認めたくえで、そこではふたつのレベルのアイロニーが提示されていると主張している<sup>9)</sup>。シースキンは、ソクラテスはアイロニーを用いていないとしながら、プラトンは『弁明』におけるソクラテスを、ゴルギアスが書いた『パラメデスの弁明』のパロディとして描いていると主張する<sup>10)</sup>。

上述した解釈に共通するのは、『弁明』におけるソクラテスは自らの無罪を勝ち取ることを重要だと考えていない、ということである。アイロニーあるいはパロディという観点から見れば、法廷におけるソクラテスの行動は、当時の慣習に一致していようと、そこから逸脱していようと、

首尾一貫していると思なすことができるのである。こうした解釈は、リデルによる指摘から派生してきたひとつの流れであるとみなすことができる。

しかし、ブリックハウス&スミスは上記の解釈に反対している。彼らの立場を簡潔に述べるなら、『弁明』におけるソクラテスは、自らの無罪を勝ち取るために全力で弁明をしているソクラテスであって、そこでの姿がアイロニーやパロディであると見なすべきではない、というものである。この見解のテキスト的な根拠としては、裁判冒頭においてソクラテスが「ことの成否は神の御心にかなうようにし、法に従って、弁明しなければなりません」(Ap. 19A) と述べていること、そして、告発に対する弁明を終わらせるときに、「裁判員は、だれでも気に入った人に奉仕することではなく、法律に従って判決を与えることを誓ったのですから」(Ap. 35C) と述べていることが挙げられる。ここから、自分自身にも聴衆にも、法律に従うことを要求していたソクラテスの姿がみえるのである。したがって、常に法を犯さないように注意していたソクラテスのこのような性格を考慮すれば、以下のように結論されるはずだと彼らは指摘している。

……従って、たとえアイロニーがソクラテスの弁論の中に見いだされ  
るとしても、アイロニーはこの案件を正しく判断しようとする陪審員  
たちの能力を、決して妨げてはならないはずである<sup>11)</sup>。

ブリックハウス&スミスの指摘に従えば、アイロニーを用いているということが、真剣に弁論をしていないということの証明にはならないのである。また、ソクラテスが法廷弁論の慣例に従っていることが、他の弁論家たちのパロディになっているという指摘も当たらない。というのも彼らによれば、裁判の始まりでどのように語るのかということに関して、古代の弁論術の理論家たちが共通して特定の要素を措定していた証拠は存在していな

いからである<sup>12)</sup>。したがって、ソクラテスが冒頭で法廷弁論の慣行に従っているとしても、「ソクラテスがそれらの真理を陪審員に説得的に伝えるために、法廷弁論の技巧に近づくことには、何も不都合なことはない<sup>13)</sup>」のである。

以上、『弁明』の冒頭部(17A-18A)に関する主たるふたつの解釈を概観してきた。一見すると相対しているこれらの解釈には、実はある共通点がみられる。それは、『弁明』におけるソクラテスが——アイロニーにせよ、真面目な弁論であるにせよ——何かしらの「弁論術」を意識的に用いている、という点である。『弁明』をパロディであると見なすシースキンの以下の解釈は、この点を最も強調しているものだと言えるだろう。

ソクラテスはゴルギアスの技術を用いたが、それは無罪の可能性を確証するために用いられたのではなく、自分の人生に関する真理を確固たるものにするために用いたのである。……真なる(true)弁論術は劣悪な(base)弁論術とは異なり、陪審員におもねらない。むしろ、陪審員を教育しようとする<sup>14)</sup>。

シースキンの解釈に従えば、ソクラテスは真なる弁論術を用いて弁論に臨んでいるのである。またブリックハウス&スミスも、自分たちの解釈が正しいのであれば、ソクラテスは「哲学的弁論術」(philosophical rhetoric)を用いることで、彼自身の立場を効果的に示しているのだ、と主張している<sup>15)</sup>。

しかし、もうひとつ別の解釈を提示することができるだろう。それは、ソクラテスの言葉を文字通り受け取る、というものである。つまり、ソクラテスは実際に弁論に精通していないし、「慣れ親しんだ言葉」以外を使用することができない、という解釈である<sup>16)</sup>。そしてこの解釈は、「弁論

術について」という副題を持つ『ゴルギアス』での弁論術に関する議論に鑑みれば、より整合的であると思われる。では、『ゴルギアス』において弁論術はどのように論じられているのだろうか。

## 2. 『ゴルギアス』における弁論術

『ゴルギアス』には古くから「弁論術について」という副題が与えられてきた。そして実際に、この対話篇の中では弁論術に関する議論がなされており、しかもソクラテスは、そこで弁論術を痛烈に批判している。それゆえに、その批判を通じてソクラテスが哲学の立場を鮮明に打ち出しているとも言えるだろう<sup>17)</sup>。だが、『ゴルギアス』は弁論術への批判に終始しているわけではない。本章では、『ゴルギアス』で扱われている弁論術に対するソクラテスの評価を概観していく。そして、批判を被る弁論術とは別の「真なる弁論術」（ἡ ἀληθινὴ ῥητορικὴ）という言葉に注目し、それがどのような意味で「真なる」ものであるのかを論じていく。

### 2-1. 劣悪な弁論術

『ゴルギアス』（451D）において、弁論術に対する定義が初めてなされる。そこでゴルギアスは、弁論術を以下のように特徴づけている。

それはね、人間に関わりのある事柄の中で、最も重要で、最も善いものだよ、ソクラテス（*Grg.* 451D）。

だが、ソクラテスはこの定義づけに満足しない。というのも、「最も善い」ものが何かということには様々な異論が生じており、一義的に決定されているわけではないからである。したがってゴルギアスは、これに続いて次のように答えている。

わたしが言おうとしているのは、言論によって、法廷においては陪審員たちを、政務審議会においては評議員たちを、民会においてはその出席者たちを、そして、その他の集会におけるすべての人々を、説得することができる能力のことだよ (Grg. 452E)。

説得という弁論術の特質は、ソクラテスによって次のように言い換えられている。

弁論術とは「説得を作り出すもの」であって、その行う仕事のすべてと、その仕事の眼目となっていることは、結局、説得を作り出すということだと、あなたは言っているのですね (Grg. 453A)。

ゴルギアスもこの言い換えに納得し、対話は進められていく。つまり、「説得を作り出すもの」というのが弁論術の定義である。

ここで重要なのは、この定義が後の議論でも否定されていない、ということである。実際、その後のポロスとの対話も「説得を作り出す」ということが問題になっているのではなく、どのような種類の説得がよいのかということが問題になっている。そして、「説得を作り出す」ことにおいてソクラテスに批判されるのが、劣悪な弁論術である。これはソクラテスとポロスの間で行われる対話で議論されている事柄であるが、実はポロスとの対話に先立って、その特徴はすでにソクラテスによって語られている。というのも、弁論術を教えるということに関連して、ソクラテスはゴルギアスにこのように尋ねているからである。

つまり、何が善で何が悪か、何が美で何が醜か、正か不正かという、



それらの事柄そのものについては、何も知らないのだけれども、それらの事柄については工夫して説得するから、知っていないけれども、知らない人々の面前では、知っている人よりもずっと知っているのだと思われるようにするのでしょうか。それとも、本当に知っているのだければならず、弁論術を学ぼうとする人は、これらの事柄をあらかじめ知ったうえで、あなたのところに来るべきなのでしょう（*Grg.* 459D-E）。

ここには、劣悪な弁論術の特徴がすでに表わされていると言えるだろう。すなわちそれは、「事柄そのものについては何も知らない」のだが、方法を工夫しているがゆえに、知っているのだと「思われる」ようにすることができるものである。こうした真実を伴わない見せかけの弁論術は、ソクラテスに痛烈に批判される。ソクラテスはポロスとの対話で弁論術を「まったく立派でないもののうちの、ある事柄の一部門である」（*Grg.* 463A）と述べているが、それは、「最善を考慮することはなく、その都度のもっとも快いのもをもって、無知な人々をとらえて欺き、そうすることで、自分をもっとも価値あるものであると思わせる」（*Grg.* 464D）からである。こうした弁論術は「迎合」（*κολακεία*）を目的としており、それゆえに、ソクラテスに糾弾されているのである。

## 2-2. 真なる弁論術

以上の議論から、弁論術は劣悪だと批判されていることが分かる。だが『ゴルギアス』ではこれに対して、真なる弁論術の存在が示唆されている。では真なる弁論術とはどのようなものか。ソクラテスがこの言葉を使うのは、これまでアテナイにいた政治家たち（ペリクレス、キモン、ミルティアデス）が、優れた政治家であったかどうかを検討している時である。結

論としては、「市民をできるだけ善くする」(Grg. 515C) という政治家本来の目的を彼らは果たせていなかったために、彼らは優れた政治家ではなかったのである。だがその結論に付け加える形で、ソクラテスは以下のように述べている。

だから、もし彼らが弁論家であったなら、真なる弁論術を使用していなかったのだし (οὐτε τῆ ἀληθινῆ ῥητορικῆ ἐχρώντο) —— というのも、そうであったなら彼らは追放されなかったから—— 迎合としての弁論術も使用していなかったのだ (Grg. 517A)。

真なる弁論術がどのようなものであるのかの明確な定義は、ここでは与えられていない。しかし、本稿 2-1 での引用 (Grg. 459D-E) などから、その内容を想定することはできるだろう。さらに、弁論術そのものがふたつに分けられうることは、ソクラテスの以下の質問からもうかがえる。

ところで、アテナイの民衆に対する弁論術は、どうだろう。……弁論家たちはいつも、自分の言論を通じて、市民たちができるだけ善くなることを目標としながら、最善を念頭に置いて話していると君には思われるかね。それとも、この人たちもまた、市民たちを喜ばせるほうへと突き進んでしまい……このことを通じて、彼らをさらに善い人間にするのか、あるいは、より悪い人間にするのかということには、まったく注意しないのかね (Grg. 502E-503A)。

この質問に対して、カリクレスは「国民のことを真剣に心にかけている人たちもいる」(Grg. 503A) として、市民を善くする弁論術と、市民を喜ばせる弁論術のふたつが存在することを認めている。ここで言われている

「市民を善くする」とは、魂に「ある種の規律と秩序」をもたらすことであり、その状態に至った人は、「正義の徳」や「節制の徳」を持った状態になる（*Grg.* 504B-D）。こうした議論のまとめとして、ソクラテスは次のように語っている。

したがってさっきの技術を持った優れた（*τεχνικός τε και αγαθός*）弁論家は、これらのことを目指しながら、どんなことを語ろうとも、その言論を通じて、魂に働きかけるのではないかね。……つまり、同胞市民たちの魂の中に、正義の徳が生じて、不正は取り除かれるように、また、節制が生じて、放埒が取り除かれるように、そしてまた、その他の徳が生じて、悪徳が離れ去るようということに心を向けながらね（*Grg.* 504D-E）。

ここで問題となっているのは、弁論家による影響である。ソクラテスが批判していた弁論家とは、身体や魂が全く善くなっていないのに、善くなっているように「見せかける」弁論家であった。これは劣悪な弁論術の使い手であろう。だがこれに対して、上述の引用でソクラテスが述べている弁論家は、「技術を持って」、対話相手の魂に正義の徳や、節制の徳を生みだすことを念頭に置いている。こうした点で、「技術を持った弁論家」こそ、真なる弁論術の使い手であると言える<sup>18)</sup>。ここから、ソクラテスが弁論術を一律に批判しようとはしていなかったことがうかがえる<sup>19)</sup>。

### 2-3. 劣悪な弁論術と真なる弁論術を分けるもの

ここまで、『ゴルギアス』における劣悪な弁論術と真なる弁論術に関して考察を続けてきた。ふたつの弁論術を大きく分けるものは、それが「技術」の名に値するかしないか、という点であると考えられる。すなわち、

劣悪な弁論術を用いることは迎合を目的とし、恥ずべき大衆演説を形作るのであるから、技術の名に値しない。真なる弁論術がこうした劣悪な弁論術と対比されるのであれば、これこそが、技術の名に値する弁論術ということになるだろう。しかし、「技術」の名に値するとはどういう意味であろうか。換言すれば、ある方法が正しく「技術」と呼ばれるためには、どのような要件を備えてなければいけないのであろうか。このことを考察する際に、『ゴルギアス』(465A)におけるソクラテスのセリフは有用であろう。料理法と医術は両方とも身体世話に属する事柄であるが、料理法は技術ではないこと理由として、ソクラテスは次のように言う。

ぼくはそのようなものを技術ではなく、経験であると主張する。というのもそれは、誰に施されるのか、あるいは、それが施すものが本性的にどのような種類のものであるのか、ということの理論的説明(λόγος)を持っておらず、その結果、それぞれの事柄の理由を言うことができないからだ。そしてぼくは、そのような理由を欠いた事柄を技術と呼ぼうとは思わない(*Grg.* 465A)。

ソクラテスのこのセリフからうかがえることは、技術は自らが対象とするものについての知識を要求するということである<sup>20)</sup>。ここでの「技術は対象とする事柄の知識を要求する」ということを本稿 2-2 において検討された真なる弁論術に適用するのであれば、真なる弁論術を用いている弁論家は、目指されているところの最善、つまり、正義の徳や節制の徳が何であるかを知らなければならない<sup>21)</sup>。劣悪な弁論術も真なる弁論術も、それが使用された場合は、相手を説得することには変わりはないであろう。だが、真なる弁論術を用いて正しく説得する場合には、対象についての知識を必要とするのである<sup>22)</sup>。そうでなければ「説得」という点に関して、

劣悪な弁論術と真なる弁論術を分けるものがなくなってしまう。以上のよう  
に劣悪な弁論術と真なる弁論術を峻別しようとするなら、その差は弁論  
家の知識の有無にあると言えるだろう<sup>23)</sup>。

### 3. 『弁明』と『ゴルギアス』に通底する「無知の自覚」

本章では、前章まで論じてきた弁論術をソクラテスとの関係からさらに  
論じていく。『ゴルギアス』においてソクラテスは、ゴルギアス・ポロ  
ス・カリクレスの3人と順番に対話を進めていくが、ここで注意したいの  
は、ソクラテスはこの3人の誰をも説得できていない、ということである。  
この事実からワイスは以下のように結論している。

ソクラテスは誰に対しても、幾度となく繰り返している厳しい真理を  
納得させることができない。……確かにソクラテスはこう言う。「ぼ  
くは、ぼくの言っていることについての証人を——ひとりだけでも  
——作り出す方法を知っている。ぼくが話している当人のことだよ」  
と。しかし、「ぼくはあらゆる人を説得する方法 (how to persuade)  
を知っている」と、彼は言わないのだ。したがって、彼が確信できる  
ことと言えば——このことですら一時的だけれども——言葉の上での  
同意でしかないのだ<sup>24)</sup>。

ワイスの指摘は、エレンコスでもって同意を取り付けている時でさえ、ソ  
クラテスは本当の意味で対話相手を説得できているわけではないというこ  
を示している<sup>25)</sup>。その理由は、ソクラテスが、最善に関する知識を欠  
いているからであろう。

実際、ソクラテスは『ゴルギアス』において自分が知識を持っていない  
ことを繰り返し伝えている。たとえば、カリクレスが「あなただけで議論

を進めることはできないかね」(Grg. 505D)と提案した時、ソクラテスはしぶしぶそれに同意して、自分ひとりで議論を進めようとする。しかしその際、彼は周りの人間に、次のような注意を与えている。

あなた方の誰かに、ぼくが本当でないことに同意を与えていると思われるのであれば、その人は議論に加わって、ぼくを論駁しなければならぬよ。それというのもこのぼくは、自分が話すことを十分に知っていて話そうとしているのではなく、むしろ協力して、あなた方と一緒に探求しようとしているのだから (Grg. 506A)。

さらに、その議論の最後では「不正を受けるよりも不正をなす方が、不正をなす人にとっての害は大きい」という結論が「鉄と鋼の論理」(Grg. 509A)によって縛られていると言及しているのにも拘わらず、ソクラテスは以下のように繰り返す。

つまりぼくは、これらのことが本当はどうであるのかを知らないのだけれども、ちょうどいまみたいに、ぼくが出会って話した人たちの中で、他のことを言いながら、笑われなかった人はひとりもないのだよ (Grg. 509A)。

ここから、「不正を受けるよりも不正をなす方が、不正をなす人にとっての害は大きい」という結論は、ソクラテスが本当に知っていることではないのだと言える。しかしそうだとするなら、ソクラテスは本稿 2-2 で言及した真なる弁論術を修得していないことになる。なぜなら、技術としてあるものは、その対象についての知識を持っていないからである。逆に言えば、もしソクラテスが真なる弁論術を修得していたら、

ソクラテスは自分の信じていることを知識として提示し、なおかつ、対話相手を説得できるはずなのである。しかし実際のところ、ソクラテスは対話相手の3人の誰をも説得できていないのである<sup>26)</sup>。

ソクラテスが知識を持っていないということは、『ゴルギアス』のみならず、『弁明』にも当てはまる。なぜなら、『弁明』のソクラテスをまた、自分の無知を自覚しているからである。

それというもたぶん、わたしたちの両方ともが、立派で善いことを何も知らないのだろうけれど、一方でこの人は、知らないのに、何かを知っていると思っているのに対し、他方わたしは知らないの、ちょうどそのように、知らないと思っているのです (Ap. 21D)。

『弁明』と『ゴルギアス』には「無知の自覚」が通底しているのである。またここから、もし法廷におけるソクラテスが真なる弁論術を修得しているとしたら、つまり、聴衆の魂に正義の徳や節制の徳をもたらすことができるとするならば、その際、ソクラテスは立派で善いことの知識を持っていなければならないはずである。しかし、プラトンが『弁明』で描いているソクラテスは、「無知を自覚しているソクラテス」である。ここから、『弁明』においてもソクラテスが真なる弁論術に精通していないことが裏付けられるだろう。

ではソクラテスには、聴衆を説得して刑罰を免れる方法が全くなかったのかと言えば、そうではない。ソクラテスには刑罰を逃れる術があったのである。それは劣悪な弁論術を用いることによる。すなわち、聴衆の最善を念頭に置くことなく、無罪を勝ち取るために聴衆の機嫌を取る弁論を行うことによってである。しかしもちろん、ソクラテスは、この手段を用いることはなかった。それは、そのような大衆演説を披露することは、彼に

としては避けるべき恥ずべき行いだからある。事実ソクラテスは、有罪判決を下した聴衆たちにこう言っている。「とんでもない。確かに手段を欠いたために、わたしは有罪になりましたが、それは言論の手段を欠いたからではなく、無思慮や無恥を欠いたためなのです」(Ap. 38D)。無思慮や無恥に基づいた弁論とは、劣悪な弁論術による弁論に他ならないであろう。それゆえに、ソクラテスが劣悪な弁論術を用いることはあり得ないのだ。

さて、以上の読み筋に従えば、『弁明』におけるソクラテスはあらゆる意味で弁論術を——少なくとも意識的には——用いていないはずである。それでは、本稿の最初の問いに戻ろう。真なる弁論術によって聴衆の魂を善くすることもできなければ、劣悪な弁論術によって無罪を勝ち取ることもできないソクラテスは、法廷でいったい何をしているのか。以下では、「慣れ親しんだ言葉」の使用を宣言する意味を考察することで、この問いへの応答を試みたい。

#### 4. 「慣れ親しんだ言葉」の意味

本稿の序で示した、ソクラテスが「慣れ親しんだ言葉」について語っている個所にもう一度注目したい。そこで彼は、「公共広場の両替商のところや他の場所で、わたしが語っているのを」(Ap. 17B) と聴衆に語りかけている。ではソクラテスは、公共広場やその他の所で何を話していたのだろうか。ポイントとなるのは、ソクラテスの以下の言葉である。

アテナイ人の皆さん、わたしはあなた方を好意的に思っていますし愛してもいますが、あなた方よりもずっと、神に従いたいと思います。また、息の続く限りそして可能な限り、哲学をすることつまり、あなた方のうちの誰かに会うときはいつでも、勧告し、指摘することをやめません。いつものようにこう言うのです (εἰωθα λέγων)。「世にも優



れた人よ、知恵においても力においても最も偉大で最も尊敬されているポリスであるアテナイの人でありながら、あなたは、できるだけ多くの金銭が手元にあるようにとか、名誉や評判に配慮していて恥ずかしくないのですか。思慮や真理や、魂ができるだけ善くなるようにとは、配慮しないし考慮もしていないのに」と（*Ap.* 29D-E）。

注目すべき点は2点ある。ひとつは、このセリフからソクラテスが普段から口にしていたことが分かるという点である。つまり彼は、公共広場や両替商のところでも、日ごろから哲学し、人々に勧告し続けていたのである。もうひとつは、これが法廷において語られているという点である。この発言は「哲学をやめるのならば無罪放免にする」という提案に対してなされたものである。だが、その提案が実際になされたわけではない。もしそのように言われたならば、自分はこのように答えるのだ、とソクラテスは語っている。そしてその応答が、「アテナイ人の皆さん」という呼びかけから始まっていることを考慮すれば、ソクラテスはそのような提案をした人物に留まらず、法廷にいるアテナイ人全員に向けて語っているのだと言えるであろう<sup>27)</sup>。これらのことから、法廷の場においても、ソクラテスは市民を相手に、いつものように勧告し、哲学をし続けていると言えるのではないだろうか。

だが、どうしてそのようなことが可能であるのだろうか。というのも、善についての知識を持たず、正しい仕方で説得するための技術を持たないソクラテスの勧告は、これまでは常に個人的なレベルのものであった。実際ソクラテスも、自分の行動について次のように述べている。

さて、ひょっとしたら奇妙なことと思われるかもしれませんが。わたしがうろろうろしながら、個人的にはこれらのことを勧告して忙しくして

いるのに、公的には、敢えて民衆の前に出ることなく、皆さんのためになることをポリスに勧告しない、というのは (AP. 31C)。

「法廷」とは、ソクラテスの生涯の中でおそらく、最も公的な、つまり政治的な領域に入るものであろう。そのような場所で普段通り哲学することを、どうして彼は是認できたのか。それが「不正」ではないと確信できたのはなぜか。その理由は、ソクラテスに現れていたダイモニオンに帰することができるだろう。裁判の終わりに、ソクラテスは次のように述べている。

わたしに馴染みのあのダイモニオンの予言は、前にはずっと途切れることなく、もしわたしが何か正しくないことを行おうとしたら、どんな小さなことにでも反対したのです……。しかし、今朝家から出ようとしたわたしに、神の合図は反対しませんでしたし、こちらの裁判所にやって来て法廷に出るときも、また言論のなかでわたしが何かを言おうとしたときも、反対しなかったのです。別の言論の機会には、色々なところでわたしが語るのを途中で引きとめてきていたのに。ですが、今はこの行動について、行為でも言葉でも、わたしに一切反対しなかったのです (Ap. 40A-B)

この発言に見られるように、ソクラテスの言動には常に、ダイモニオンによる制限が加わっていたということは重要である。というのもここから、ソクラテスが日ごろから用いていた「慣れ親しんだ言葉」もまた、ダイモニオンによる吟味を受けていたということが分かるからである。そうであるなら、「慣れ親しんだ言葉」とは、単に日常的に使われていたという意味を超えて、ダイモニオンによる制限を潜り抜けてきた、いわば、神聖な

ものであると言えるであろう。ここからソクラテスは、「慣れ親しんだ言葉」を用いることが最も不正を冒す可能性が少ないと考えることができたのである。だがその想定は、ソクラテスにとってある種の「賭け」であり、危ういものであったに違いない。なぜなら、公の場における哲学の実践を制限していたのもまた、ダイモニオンだったからである（*Ap.* 30D）<sup>28</sup>。それゆえに、弁論を始めるにあたって、ソクラテスは自らの語る言葉が正しいのだと「信じる」（πιστεύειν）（*Ap.* 17C）ことしかできなかったのである。それでもなお、自分のこれまでの行いを信じ——そしてこれまでそれを許してきたダイモニオンを信じ——法廷においてもソクラテスは哲学しようとしているのであり、それが「慣れ親しんだ言葉」の使用という宣言に現れているのである<sup>29</sup>。

## 結語

本稿では、『弁明』の冒頭において、なぜソクラテスは「慣れ親しんだ言葉」の使用を宣言したのかという問題を、『ゴルギアス』における弁論術の定義を検討することによって考察してきた。『ゴルギアス』によれば、真なる弁論術は対象の知識を必要とする以上、ソクラテスがこれを用いることはできない。だからと言って、劣悪な弁論術を用いることもできない。それは技術に値しない恥ずべきものだからである。したがって、ソクラテスはあらゆる意味で弁論術を用いることができないのである。『ゴルギアス』におけるこうしたソクラテスは、『弁明』にも引き継がれている。あらゆる意味で弁論術を用いることができないソクラテスは「慣れ親しんだ言葉」を用いることで、裁判という公的な場であっても、自分が哲学し続けるということを宣言しているのである。それは、もしかしたら「不正」な行いであったのかもしれない。だが、法廷においても「ダイモニオンに承認されてきた言葉」を用いること、つまり、哲学し続けることが正しい

のだと、ソクラテスは信じているのである。そして実際に、それはダイモニオンが現れなかったという意味で、正しかったのである。したがって、『弁明』のソクラテスは、弁論家に対するアイロニーやパロディを示しているのではない。そこではいつものように哲学をし、人々を吟味するソクラテスが現れているのであり、プラトンもまた、そのようなソクラテスを描いているのである。

### 〔凡例〕

プラトン対話篇からの引用に際しては、底本として以下のものを使用した。

- ・『ソクラテスの弁明』：Duke, E.A. et al (eds.) (1995) *Platonis Opera*, I, Oxford Classical Texts, Oxford University Press.
- ・『ゴルギアス』：Dodds, E.R. (1959) *Plato Gorgias: A Revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford University Press.

引用箇所の表示は、Liddell, H.G. & Scott, R. (1996) *Greek-English Lexicon*, Oxford University Press. で使用されている略記記号を用いた。訳出に関しては、文献表に挙げた各種翻訳を参照した。

### 〔注〕

- 1) 『ソクラテスの弁明』という表題の著作を残した人物としては、プラトンの他に、クセノポンが挙げられる。しかしソクラテスが行った法廷弁論に関しては、両者は意見を異にしている。最も大きな差異は、刑罰の対案を申し出る場面に存在しているであろう。プラトンの描いたソクラテスは「迎賓館での食事」を要求しているのに対し (*Ap.* 37A)、クセノポンの描くソクラテスは「不正を為したと認めることになるから」として、対案の申し出を拒否しているからである (*Xen. Ap.* 1. 23)。また、裁判全体に関して言えば、2世紀に生きたテュロスのマクシモスによれば、ソクラテスは裁判の最中、終始無言であったとされている (Cf. Trapp (1997: p. 30.))。
- 2) Dodds (1959: p. 370.) 「菓子職人 (pastrycook) の演説は、裁判でソクラテスに対してなされた告発の、軽妙なパロディである」
- 3) Allen (1980: p. 10.) 加えてアレン自身は、『ゴルギアス』は『弁明』へのコ

メントを意図していると考えている (Cf. Allen (1980: p. 5.))。

- 4) これは納富 (2012) で使用されている訳語でもある。
- 5) 甲斐 (2011: 238 頁。)
- 6) Riddell (1867: pp. xx-xxi.)
- 7) Burnet (1914: p. 146.)
- 8) Burnet (1924: p. 147.)
- 9) Cf. Allen (1980: pp. 4-7.) なお、アレンによれば、アイロニーの第一段階としては、『弁明』において提示されている「偽り」が挙げられる。それはつまり、「ソクラテスは演説の能力を否認しつつ、続けて、非常に巧みな——弁論の傑作となるような——演説を作り出している」ということである。アイロニーの第二段階としては、「自己弁護の演説において、ソクラテスは、自分に対して正式に申し立てられた告発を否定することすらしていない」ということが挙げられる。
- 10) Cf. Seeskin (1982: p. 97f.) また、デニアもプラトンの『弁明』と、ゴルギアスによる『パラメデスの弁明』との間の類似性に注目している (Cf. Denyer (2019: p. 6f.))。
- 11) Brickhouse & Smith (1989: p. 43.) (邦訳: 51 頁以下。) なお本稿におけるこの著作の引用は、米澤・三嶋訳 (1994) に拠っている。
- 12) Cf. Brickhouse & Smith (1989: p. 51.) (邦訳: 87 頁。)
- 13) Brickhouse & Smith (1989: p. 58.) (邦訳: 95 頁。)
- 14) Seeskin (1982: p. 99.) したがってシースキンは、ソクラテスに『パラメデスの弁明』におけるパラメデスと同じ弁論術を使わせることで、ゴルギアスを「ひっくり返す」(turn on his head) ことこそが、プラトンの意図であると解釈している。
- 15) Cf. Brickhouse & Smith (1989: p. 59.) (邦訳: 97 頁。) 哲学的弁論術がどのようなものであるのかの定義は、本書では為されていないように思われる。しかし、アレンが哲学的弁論術という言葉でもって、『ゴルギアス』における真なる弁論術を指しており (Cf. Allen (1980: p. 12.))、ブリックハウス&スミスがそのアレンの研究を参考文献に挙げていることを考慮すれば、ブリックハウス&スミスもまた、アレンと同じ意味で哲学的弁論術を使用している可能性は高いと思われる。
- 16) この筋の解釈が可能であることは、ストークスによって示唆されている。ストークスはまず、『弁明』(17A-18A) におけるソクラテスの発言の特徴は、少なくとも一読した限りでは、法廷弁論の定型句としても、事実

(truth) としても解釈されうることを指摘し、そういった解釈上の困難さをプラトン自身が意図的に作り出していると主張している (Stokes (1997: p. 97.)). この指摘そのものが、本稿で取ろうとする解釈を直接支持するものではないかもしれない。だが、ストークスがバーネットの解釈を「奇妙にも」(oddly) という言葉とともに説明していることを考慮すれば、ソクラテスの言葉に法廷弁論の定型や弁論術を読み込もうとする解釈の拙速さを戒めているのだとも言えるであろう。

- 17) 加来は『ゴルギアス』という対話篇にプラトン自身の関心を読み込む。つまり『ゴルギアス』とは、政治の世界を目指していたプラトンが、そこから転向し、哲学への道を歩み始めたという声明としての「プラトンの弁明」(Apologia Platonis) なのである (加来 (1960: 28 頁))。
- 18) Cf. Dodds (1959: p. 360.), Irwin (1979: p. 235f.) 以上の研究は、真なる弁論術を本稿と同じ箇所結び付けて考えている。
- 19) 最初のゴルギアスとの対話において、ゴルギアスから弁論術を学んだものは正・不正についても学ぶことになるというゴルギアスの言葉 (Grg. 460A) を受けて、ソクラテスは、大工や音楽家、医者 の例から「正しいことを学んだら、正しい人になる」(ὁ τὰ δίκαια μεμαθηκώς δίκαιος) ということをゴルギアスに確認している (Grg. 460B)。ここで正義の人が大工や医者のような何らかの技術を持った人と比較されていることに注目し、加来は次の様に述べている。「ソクラテスの言う学ぶとか、知るとするのは、ちょうど大工が大工のことを学べば、その知識は身につけて、それによって家を建てるのが出来るように、道徳的な知の場合も、それは身につけられた技能のごときものを意味していたのである……したがってまた、その様に技能に比せられるべき「知」はちょうどまさに、「徳」と呼ばれるところのものである」(加来 (2007: 289 頁))。このように考えるなら、他者の魂を善くする「技術」としての真なる弁論術を持つことは、徳を持つことになることであると言えるかもしれない。
- 20) 須賀もまた、同じように技術に理論的な知識が要求されることを指摘している (須賀 (2011: 26 頁、注7を参照))。
- 21) この点は『バイドロス』(265D以降)の議論と大いに重なる点がある。
- 22) 『ゴルギアス』(454D)から始まる「学識」(μάθησις)と「信念」(πίστις)の差異への言及は、本稿での議論と重なる。すなわち真なる弁論術は、知識を与えるような説得をなすのである (Cf. Grg. 454E)。
- 23) 本稿では真なる弁論術を技術のひとつとして考察してきた。しかし、真な

る弁論術を技術とは見なさない研究も存在する。たとえば木下は、「真なる弁論術」とは、恥ずべき大衆演説としての弁論術とは峻別されているけれども、それは「弁論術」という形で、ひとつの技術と見なされるべきではないと主張する。なぜなら、弁論術とはそもそも「司法術」の下位区分であったからである。すなわち、弁論術が技術の要件を満たした場合には、それは「司法術」と区別がつかないものになってしまうため、「真なる弁論術」という形での技術は存在しないのである。しかし、「真なる弁論術」＝「司法術」であるのなら、本論で引用した当該の箇所（517A）において、なぜ「司法術」ではなく、わざわざ「真なる弁論術」という言葉が使われたのだろうか。木下はこの語の使用は「料理術の技術性が否定されるためにポロスに対して語られた二つの言葉（465A, 500B）と完全にパラレルになっている」ことに注目し（木下（1998: 28 頁。)), ここでは弁論術が真の技術足らんとするのなら、どのような要件を備えていなければならないかを説明しているだけであると解釈する。だが、料理法とのパラレルで語るのであれば、身体に対して何が善いのかということの知識と、食材をうまく調理することは別々のことであろう。したがって、身体に対して何が善いのかという知識を持ちながら、身体に善をなす食材を「うまく」調理するという、知識を持ち合わせた料理術が措定できるのではないかと思われる。そうであるなら、真なる弁論術も司法術から独立して存立可能ということになるはずである。また、木下に対して須賀は、「弁論術が一般にもつ特質としての「説得」という作用は、知識の所有から必然的に導かれるわけではない」（須賀（2011: 21 頁。))とし、技術に知識が必要なことを認めつつも、それだけでは「説得」を作り出すことはできないという点から、真なる弁論術は司法術に回収されないと主張している。

- 24) Weiss (2000: p. 204.)
- 25) またワイスは、さらにこのように指摘する。「だからソクラテスは、自分が市民を改善することができないと——それを試みているけれど——認めざるを得ないのだ」(Weiss (2000: p. 204f.)) だが、この見解は『弁明』(36D)における、「と言いますのも、競技会の優勝者はあなた方を幸せであると思わせてくれますが、わたしは実際にあなた方を幸せにするのです」という発言と矛盾しているように思われるかもしれない。論者はこの問題に関し、『弁明』における有罪無罪の投票の前後で、ソクラテスの聴衆に対する態度に変化が生じていると考えているが、この問題に関しては稿を改めたい。

- 26) このことは、『ゴルギアス』の最終部でソクラテスによって語られるのが「物語」であることによっても示されている。死後の世界における幸福とその裁定者たる神々の物語を、ソクラテスは、「思うに、君はそれを物語(μῦθον)と考えるだろうけど、ぼくはこれを本当の話(λόγον)と考えているよ」という言葉と共に始めている(*Grg.* 523A)。つまり、ソクラテスはこの物語を、普遍的妥当性をもった理論として語るができないのである。もし普遍的妥当性を持っていることをソクラテスが知っているのだとしたら、それは知識であり、真なる弁論術でもって語られうる。それゆえに、カリクレスを説得することもできたはずである。だが実際はそうでないため、ソクラテスは物語を終えた後も、他の人に勧める(παρακαλεῖν)ことしかできないし、カリクレスに対して「反対を推奨する」(ἀντιπαρακαλεῖν)ことしかできないのである(Cf. *Grg.* 526E)。
- 27) 神が人間たちの代表としてソクラテスを例に出したのと同じように、ソクラテスもまた、この提案者を例に出して、アテナイ市民全員に対して語っているとも言えるだろう。
- 28) したがってソクラテスの想定の正しさは、弁論が終わった後に、事後的に確認されたものに過ぎない。
- 29) このような読み筋に従えば、「何か驚くべきことが起こった」(θαυμάσιόν τι γέγονεν) (*Ap.* 40A) という言葉から始められているダイモニオンの不在は、ソクラテスが公の場において哲学をしたことに向けられていた、とも読めるであろう。

### 〔文献表〕

- Allen, A.E. (1989) *Socrates and Legal Obligation*, University of Minnesota Press.
- Brickhouse, T.C. & Smith, N.D. (1989, reprinted: 2002) *Socrates on Trial*, Clarendon Press. (邦訳: 米澤茂・三嶋輝夫訳 (1994) 『裁かれたソクラテス』、東海大学出版会)
- Burnet, J. (1924, first published paperback: 1977) *Plato: Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Clarendon Press.
- Burnet, J. (1914, reset and reprinted: 1964) *Greek Philosophy: Thales to Plato*, St Martin's Press.
- Denyer, N. (ed.) (2019) *Plato and Xenophon Apologies of Socrates*, Cambridge University Press.



- de Strycker, E. & Slings, S.R. (ed.) (1994) *Plato's Apology of Socrates: A Literary & Philosophical Study with a Running Commentary*, E.J. Brill.
- Irwin, T. (1979) *Plato: Gorgias*, Clarendon Press.
- Riddell, J. (1867, reprinted: Arno press, 1973) *The Apology of Plato*, Oxford.
- Seeskin, K. (1982), "Is *Apology of Socrates* a Parody?", *Philosophy and Literature*, Vol. 6, No. 1 and 2, Johns Hopkins University Press, pp. 94–105.
- Stokes, M.C. (1997) *Plato: Apology: With an Introduction, Translation and Commentary*, Aris & Phillips.
- Trapp, M.B. (tr.) (1997) *Maximus of Tyre: The Philosophical Orations*, Clarendon Press.
- Weiss, R. (2003) "Oh Brother! The Fraternity of Rhetoric and Philosophy in Plato's *Gorgias*", *Interpretation: A Journal of Political Philosophy*, Vol. 30, issue2, pp. 195–206.
- プラトン『ソクラテスの弁明』、納富信留訳（2012）、光文社（光文社古典新訳文庫）。
- プラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』、三嶋輝夫・田中享英訳（1998）、講談社（講談社学術文庫）。
- プラトン『ゴルギアス』、加来彰俊訳（1967、改版：2007）、岩波書店（岩波文庫）。
- プラトン『ゴルギアス』、藤沢令夫訳（1966）、田中美知太郎編『プラトン I』、（世界の名著 6）中央公論社。
- 甲斐博見（2011）『ソクラテスの哲学——プラトン『ソクラテスの弁明』の研究』、知泉書館。
- 加来彰俊（1960）「ゴルギアス篇におけるプラトンの意図」、日本西洋古典学会『西洋古典学研究』（8）、28–42 頁。
- 木下昌巳（1998）「弁論術はなぜ技術ではないのか？——プラトン『ゴルギアス』における弁論術の技術性」、『古代哲学研究室紀要——HYPOTHESIS』（8）、20–35 頁。
- 須賀麻衣（2011）「説得のための弁論術——プラトン『ゴルギアス』における弁論術再考」、『早稲田政治公法研究』（96）、17–30 頁。
- 田坂さつき（2010）「「無知」をめぐる「ことば」と認識——プラトン『ソクラテスの弁明』17a1–30c1 の一考察——」、『立正大学文学部論叢』（131）、1–25 頁。

（田代 嶺：令和元年度 哲学専攻博士後期課程 単位取得退学）

On the oration of Socrates in court: From the relation between Plato's

*Apology of Socrates and Gorgias*

TASHIRO, Ryo

The purpose of this paper is to interpret Socrates' actions in Plato's *Apology of Socrates* through *Gorgias*. In doing so, I focus on the phrase "familiar language," which Socrates refers to at the text's opening. Although many previous studies have examined this phrase and the entire opening, they interpret it, as well as the whole of the *Apology*, as irony or parody. Unlike these studies, this paper aims to interpret the phrase at face value by considering the sections on rhetoric in Plato's *Gorgias*. In *Gorgias*, it is important to distinguish base rhetoric from true rhetoric, as true rhetoric is good and based on technique, while base rhetoric is bad and only based on experience.

This paper argues that in *Gorgias*, Socrates does not—indeed, cannot—persuade all his interlocutors because he has not mastered true rhetoric, which requires knowledge about the best (for example, knowledge about justice or temperance). That he does not master true rhetoric applies to the *Apology* because in it, Socrates agrees that he is ignorant of the best. Because he lacks the knowledge required for true rhetoric (i. e., is ignorant of the best), Socrates cannot help but use "familiar language." But what exactly is "familiar language"? I think it is the tool with which Socrates does philosophy, so I conclude that the phrase is used to describe Socrates doing philosophy in court. Perhaps doing philosophy in court is unjust, but Socrates has no choice. At the opening of the *Apology*, he can only believe what he claims is true. By the end, however, he is certain that his choice was right because his daimonion has not appeared throughout the day of trial.

(令和元年度哲学専攻 博士後期課程単位取得退学)